「今日の説教、聴き手のために」　2009/3/15　明治学院教会(147)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「ゲッセマネのイエス」　マルコ１４：３２－４２。

1、「ゲッセマネのイエスの祈り」は学んでも尽きない事柄を多く含む。
今日は「イエスはひどく恐れてもだえ始め」（33）の句から学びたい。

2、死を目の前にしての二つの生き方。一つは泰然として死を受容する。
臨済宗の僧快川紹喜（かいせんじょうき？－1582）の言葉「安禅は必ずしも山水を用いず心頭滅却すれば火も自（おのずか）ら涼し」。従容たるソクラテスの死。

3、もう一方で、戸惑いが逆に救い。「死に直面して、びくともしない名僧の話だけでは困る。死に直面して、悲嘆し狼狽する名僧もいなければ凡人は救われない」（亀井勝一郎『思想の花びら』）。

4、イエスは後者。イエスは何を恐れたのか、迫りくる死か。それだけでは説明が付かない。死を予測したエルサレム入場（宮清め。過越の食事）。イエスは過去の死人が甦って天上の祝宴に着いているを宣べ伝えている。（イエスは神の子・キリストだから恐れがない、という理解を福音書はとらない。使命への服従において神との愛の一体性に悩んだという説明［ある新約聖書学者］も文脈から不自然。イエスの死の神学的意味付けは後世のもの）。大貫隆氏の理解は「死の意味が見えないところを悩んだ。説明された苦悩はもはや苦悩ではない。覚悟の死は私たちの生の一様式となり、生の内部に収まる。ところが生の内部に収まらない死、生きている事その事をゼロにするような死、信仰の人の信を破壊するような死がイエスに迫っている事を予感して“恐れもだえた”のである。」という。「自分の言動を動機づけてきた根源的はメタファー（隠喩・対象物を間接的に他のものに譬える。イエスの場合、「天上の祝宴」）での意味付けが破れた。

5、応えを手の内に取り込まないまま、ゆだねて先に進む。「御心に適うことが行われますように」。先に進む、進み方の秘密が「アッバ、父よ」（イエスのもう一つのメタファー）という呼び掛けにある。「アッバなる父」の神の意志をたづね求める必死の闘いが祈りであった。天の父という観念はユダヤ教にある。それは家父長制の観念で、一対一で対面状況の「わが父よ！」とは異なる。アッバはアラム語で「家庭内で幼児が父親に向かって用いる純粋な呼び掛け」。福音書ではイエスが逮捕前夜の絶対絶命の危機の中の祈りの中に一回だけ現れる。「アッバ」が神に対するイエスの最も奥まったところからの叫びであったと考えて間違いない。建て前から自由にされてわが子と向き合う父を知っていた。ここに、神を父、人間を子に見立てる発言、神と人間の関係を表現するモデルの発見がイエスにはあった。「放蕩息子」「二人の息子」「主の祈り」の例がある。

6、「天にいます／おん父上を呼びて／おん父上さま／おん父上さまと唱えまつる／出ずる息に呼び／入りきたる息に呼びたてまつる／われはみ名を呼ぶばかりのものにてあり」（八木重吉の詩）。関係を、手の内に収めない。分かったものにしないというところに祈りがある。「御名を呼ぶばかりのもの」でありたい。